

先週の月曜日、一月九日は「成人の日」でした。「成人」（成年）って、何歳のことか知っていますか。二十歳？残念。違います。

昨年（二〇二二年）四月に「民法」という法律が改められて、成年はそれまでの二十歳ではなく、十八歳に変更となりました。

つまり「大人」になるのが早くなったと言えるし、子どもでいられる時間が短くなったとも言えます。民法の一部が改められて、十八歳で何ができるようになったかと言うと、選挙の投票ができた、携帯電話を買ったり、クレジットカードを作ったり、十年有効のパスポートが取れたり、医師や公認会計士、司法書士といった、国家資格のいる難しい仕事に就くための試験を、受けたりできるようになりました。ただし、民法の成年年齢は十八歳に引き下げられましたが、お酒を飲んだり、タバコを吸ったり、ギャンブルと言つて、競馬や競輪のような賭け事したりする年齢制限については、今までのまま二十歳です。

結婚できる年齢は、男性は十八歳から。女性には十六歳からでしたが、女性も十八歳に引き上げられるなど、色々な改正がありました。

そんなこんなで、今年、一月九日の「成人の日」は、十八歳の人が集まるのかと思いきや、各地の成人式に集まったのは、ほとんど地方で二十歳の人だったようです。ですから、混乱を避けるために「成人の日」という名前を避けて、「二十歳のつどい」のように

名前を変えてイベントを行ったようです。



さて、一九二〇年の今日、つまり一月十六日にアメリカで「禁酒法」という法律が実施されました。この法律ができたために、お酒を造ることや売ることが禁止されました。その結果どうなったか。お酒を飲みたい人がいなくなつた訳ではないので、お酒が必要で、そこでギャンブルの人たちが秘密にお酒を造つて売りさばきました。この秘密に造つた法律違反のお酒を「密造酒」と言いますが、質が悪くても飛ぶように売れたそうです。そうするとこれは儲かるということで、密造酒を作る人たちが増え、結局「禁酒法」が出される前の状態より、造られるお酒の量がグッと増えてしまったのだとか。

人間には、何かを選択するのを制限されたり、自由を奪われたりすると、それにわざと逆らいたくなる気持ち（心理的リアクタンス）と言います。が、生じるのだそうです。だから、お酒を禁止された時、それに逆らいたく思う人がたくさん出てきて、結果として造られるお酒の量が増えてしまったのです。君たちでもあるでしょう。おいしいラーメンを食べるとき、「ラーメンは塩分が多いので体に悪いからやめなさい。」なんて言われると、確かにそうかもしれないけれど、

逆にラーメンを食べ続けなくなるでしょう。

ゲームをやつていて、「ゲームなんかより、文学の本を読んだ方がためになる。」なんて言われると、間違いなくそれは正しいかもしれないけれど、ゲームをやめる気は決して起らない。これが、リアクタンスです。先生たちも保護者の方々も、子どもだった時はそうだったし、今でもリアクタンスは生じます。だから君たちにあれやこれや言いたくないのですが、言わざるを得ない時もあります。「登下校の態度をきちんと！」 「提出物を出さない！」 「宿題やつた!？」 のように…。

さて、どうするか。方法は三つ。①言われる前にやつてしまう。②従う↓（先生や保護者に言われたことにムカツと来たら、これは心理的リアクタンスのなせる業に違いないと考えて、モヤモヤするけれど言う事に従う。）③覚悟を決める。↓（言われるとリアクタンスが起るので、もう言わないで欲しい。そのかわり責任は自分でとると覚悟を決める。）③は、たとえば「駅で駅伝のように走っている児童がいます。こんな子は学校をやめさせてください。」なんてお電話が来たら、本当にやめさせるかどうかは別として、君たちが自分の行動のまずい点を自覚して、きつちりと責任をとつていただくということです。

君たちにはどの方法が合いそうですか。「成人」になる訓練として、考えてみてください。

（立教小学校校長 田代 正行）